

聖書：ピリピ 1：1～2

説教題：恵みと平安

日時：2016年10月23日（朝拝）

今日からピリピ人への手紙を読んで行きたいと思います。この手紙は全部で4章、パウロの書簡の中では短い方に属します。先に見たローマ書は全部で16章ありましたが、その4分の1になります。しかしその内容は非常に豊かと言えます。宝石のような御言葉が一杯詰まっています。この手紙の言葉に励まされて来た人はたくさんいるのではないのでしょうか。なぜそうであるのかは、この手紙の性格とも関係します。

まずピリピ教会と、この手紙の執筆事情から見て行きたいと思います。ピリピ教会は、ご存知の通り、パウロの第2回伝道旅行において設立された教会です。使徒の働き16章にその様子が記されています。パウロは第1回伝道旅行で福音を伝えた町々をフォローアップした後、聖霊に導かれて、小アジア北西部のトロアスへ導かれました。そしてある夜、幻の中で一人のマケドニヤ人が「マケドニヤに渡って来て、私たちに助けてください」と懇願するのを見て、海を渡り、ヨーロッパ大陸へと進んで行きます。そしてまず伝道したのがマケドニヤ地方のこのピリピでした。この町はローマの植民都市で、退役軍人が多く住んでいました。通常、パウロは新しい土地ではユダヤ人の会堂で宣教することから始めましたが、この町にユダヤ人の会堂はなかったようです。そこで祈り場があると思われた川岸に行き、そこに集まった女たちに話をしました。そこでまず救われたのが紫布商人で神を敬うルデヤという女でした。その後、占いの霊につかれた若い女奴隷が救われ、さらに牢屋の番をしていた看守が「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」との言葉により、全家族そろって神を信じました。パウロたちはその後、他の町へと進みましたが、今見た人々がピリピ教会の土台になった人たちだったと考えられます。

その後も、パウロとピリピ教会との間には深い関係が継続しました。特にピリピ教会は、パウロの福音宣教を支援してくれた教会でした。4章15節～16節：「ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおおり、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。テサロニケにいたときでさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。」パウロはお金目的

で宣教していると非難されないように、そういう恐れがあるところでは一切、献金を受けませんでした。ピリピ教会との間にその心配はなかったのです。このことから見ても、いかにパウロと良好な関係にあった教会だったかが分かります。

さてパウロはこの手紙の執筆時、どこにいたのでしょうか。この手紙から分かることは、彼はこの時、囚われの身にあったということです。1章13～14節には、「キリストのゆえに投獄されている」と書かれています。1章17節にも「投獄されている私を」と出て来ます。これはいつのことなのでしょう。1章13節に「親衛隊」という言葉が出て来ますし、4章22節に「カイザルの家」と出て来ることから、それはローマであったと考えられます。すなわち使徒の働きの最後で、裁判を待つ間、満2年間、番兵付きの家に住んだと記録されていますが、その時にこの手紙が書かれたものと思われます。

この投獄中のパウロを助けるために、ピリピ教会はエパフロデトを遣わして支援しました。4章18節：「私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。」しかしそのエパフロデトはパウロのもとにいる間に重病になり、死ぬほどの病気にかかりました。そのことがピリピ教会にも伝わっていました。しかしエパフロデトは神のあわれみによって回復します。そこでパウロはピリピ教会が心配していることを思って、エパフロデトを送り返すのです。2章28節：「そこで、私は大急ぎで彼を送ります。あなたがたが彼に再び会って喜び、私も心配が少なくなるためです。」その際に彼に持たせたのが、このピリピ人への手紙だったのです。

パウロはその際、ピリピ人たちが、投獄されている自分を心配していることを知っていたので、自らの近況も記しました。パウロは自分のことをどのように報告しているのでしょうか。それは牢屋の中にあるけれども全く落ち込んでいないということです。むしろ喜びに満たされている！ということです。もちろん牢屋の中は、外に比べれば何かと不自由です。またパウロを苦しめようとする人々がいたこともこの手紙の中から分かります。にもかかわらず、パウロは一言で「喜び」で特徴づけられる状態にあった。そしてその彼が、外にいる読者に向かって「いつも喜んでいなさい」と励ますのです。3章1節：「最後に、私の兄弟たちよ。主にあって喜びなさい。」4章4節：「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」これこそこの書が私たちに語る衝撃的なメッセージではないでしょうか。

私たちは自分を取り巻く状況、あるいは周りの環境に振り回されやすいものです。しかし獄中のパウロが私たちに向かって「いつも主にあって喜べ」と語ります。これはとてつもないメッセージです。キリストにあるとはどういうことなのかを改めて教えてください。この書は福音を組織的・系統的に論述するものではありませんが、パウロはピリピ人への近況報告のために、自らのあかしを多くこの手紙で述べています。そのため、この手紙は教会に宛てられたパウロの書簡の中でも最も個人的な手紙となっています。私たちがこのピリピ書を読んで励まされるのは、このパウロの個人的なあかしを通して、福音は牢屋の中にいる人であっても何をもたらずのか、という実際的なメッセージを聞くからでしょう。パウロが持つ信仰、希望、愛、喜び、平安、力、・・・が隅々にあふれています。その彼の言わば信仰の鼓動に接することができるのです。

またパウロは他にいくつかの勧めもこの手紙に含めています。ピリピ教会にはある種の不一致の問題があったようです。そのための勧めが特に2章に記されています。また誤った教理に対する警告が3章に含まれています。いずれも深刻な状況には至っていませんが、パウロはピリピ教会の祝福のために、そのことにも触れています。この書はそういう手紙なのです。

さて今日は序論として、ここまで少し多くの時間を使いましたが、残り半分の時間で最初の1～2節を見たいと思います。この部分は通常の手紙の形式に従って、第一に手紙の差出人、第二に宛先、第三に初めの祈りが記されています。しかし他の手紙もそうであるように、ここにすでにこの手紙の特色が出ていると言えます。

まず差出人としてパウロは自分を「キリスト・イエスのしもべ」と言います。他の多くの手紙では「使徒」であることがまず述べられています。このピリピ書の前に置かれているローマ書、Iコリント書、IIコリント書、ガラテヤ書、エペソ書のどの書もそうです。またこの後のコロサイ書もそうです。しかしピリピ書で、パウロは自分を「使徒」とは名乗っていません。それはピリピ教会にはそのことが十分に受け入れられていたので、あえてそれに触れる必要がなかったからだと考えられます。むしろ彼は自分を「しもべ」と言っています。これはギリシャ語ではドゥロスという言葉で、直訳すれば「奴隷」です。つまりパウロはキリストの奴隷である。そういう者として今、鎖につながれ、囚われの身にある。しかしこのように「キリストのもの」として、キリストに徹底して

仕えて生きるところに真の喜びと幸いがあると言っているように思います。また同じ言葉は2章で互いにへりくだって歩むべきことを奨励する際、キリストが「仕える者」の姿を取ったと語られるところでも使われます。私たちはともすると、低い位置よりも高い位置にいたいと思います。しかししもべとして生きる生き方こそ、キリストにならう生き方であり、そこに神によって高められ、祝福されるあり方があるというメッセージをすでにここに持っていたとも考えられます。

また共同の差出人として、テモテの名があげられています。彼は使徒の働き 16 章でピリピ伝道の前にパウロと行動をとともにするようになったパウロの愛弟子です。ピリピ教会はもちろん彼のことを良く知っていました。またこの後、2章 19～23 節で語られるように、パウロは自分がどうなるか分かり次第、先にテモテを遣わす予定でいました。そのテモテの推薦のためにパウロは自分と並べて彼の名も記したのでしょう。

次に手紙の宛先についてはこう記されています。「ピリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、また監督と執事たちへ。」 まずピリピ人たちが「聖徒たち」と言われています。ご存知のように、「聖徒」はクリスチャンの中の特別な聖人・聖人を指す言葉ではありません。聖書における「聖」という言葉の基本的な意味は「区別された」とか「とり分けられた」というもので、これはクリスチャンが「聖別された者たち」であることを意味しています。それはどのようにしてなされたのでしょうか。それはその前にある言葉の通り、「キリスト・イエスにあって」ということです。私たちは自分で自分を救うことはできず、ただキリストが私たちのために尊いご自身を十字架上でささげ、私たちの罪の問題を解決してくださいました。そしてご自身が持つ 100 点満点の完全な義を私たちに与えてくださり、ご自身とのつながりにおいて私たちを聖めてくださいました。パウロはこうしてピリピ人たちを信仰の観点から表現することによって、彼らが今やどんな者たちとされているかを思い起こさせているのです。そして実にこのことを良く自覚し、心から感謝してこの真理に生きるところに、パウロがこれから述べる「いつも主にあって喜ぶ」という生活が導かれるのです。

また「監督と執事たちへ」と言われています。「監督」と「長老」は同じ人たちを指すことが聖書の色々な箇所から分かりますが、このように当時の教会にはすでに長老と執事が立てられていたことが分かります。なぜ彼らが特別にここで述べられているのでしょうか。詳しい理由は分かりませんが、これはピリピ教会のパウロへの支援が長老・

執事たちのリードによったからかもしれません。あるいはこれからこの書で述べられるメッセージをふさわしく用いて、この群れを導く使命と責任がこれらの教会役員に特にあることを思い起こさせるためかもしれません。

そうして2節で最初の祈りが記されます。これはⅠコリント、Ⅱコリント、ガラテヤ書、エペソ書、ピレモン書と全く同じものです。しかしだからと言って、単なる形式的なお決まりの文句というのではなく、むしろ聞くたびにキリスト教信仰の根本原則を思い起こさせられる祈りとなっています。これは二つの祈りをくっつけたものです。一つ目は「恵みがありますように」。当時のギリシャ語での挨拶は、「喜びなさい」という意味の「カイレイン」というものでした。新約聖書でもヤコブの手紙の冒頭で、この「カイレイン」という言葉が使われていて、新改訳聖書は「挨拶を送ります」と訳しています。しかしパウロはこのカイレインと挨拶するところを「恵み」という意味の「カリス」にもじったのです。こうしてキリスト教の旗印である「恵み」を祈り求める挨拶を第一としたのです。恵みとは何でしょう。恵みとは受けるに値しない者に一方的に与えられる神の好意のことです。私たち罪人にとっての望みは、まさにこの恵みです。自分の行ないによらず、ただ神が垂れてくださる恵みこそ救いです。

そして二つ目は「平安がありますように」。これはヘブル語の「シャローム」をそのまま踏襲したものです。ご存知のように、聖書言語における「平安」は「平和」と同じです。この平安は単なる私たちの主観的な心の気持ちのことではありません。平安また平和には客観的な側面があります。それは神との平和です。実に私たち人間が平安を持っていない根本原因は神との平和を持っていないところに起因します。神との平和を持つことこそ、私たちが平安に生きるための基礎です。

ここで大事なことは、一つ目の恵みがあって初めて、二つ目の平安があるということです。恵みがなければ平安はないのです。旧約聖書には、平安がないのに「平安だ、平安だ」と語る偽りの人々のことが述べられています。平安は私たちの罪が正しく解決されることなしには私たちのところにやって来ません。ですからここで恵みと平安は「私たちの父なる神と主イエス・キリストから来る」と言われています。単に神から来るだけでなく、イエス・キリストから来る。すなわちイエス・キリストの十字架のみわざを通して来るのです。私たちの代わりに十字架上で尊い血潮を流してくださった方から来るのです。この方と結び合わされることを通して、私たちに真の平安はやって来ます。

そしてこの平安を持つ時に、私たちはあらゆる状況を乗り越える喜びに生かされる者となるのです。

私たちは自分に問いたいと思います。私は今、この平安を持っているだろうか。心の静けさ、落ち着き、感謝、確信、満たしを頂いているだろうか。それは恵みにより、キリストの十字架を通し、キリストと結ばれる人に与えられます。その人がここで言われている平安を持つことができます。4章7節に「人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれる」と出て来ますが、神ご自身の内に満ちている神の平安が、私たちをも包むようになるのです。これをいただくところに、どんな時も喜ぶという祝福の生活が導かれるのです。

私たちはこのピリピ人への手紙を通して、喜びの生活の秘訣を知りたいと思います。獄中から「私は喜んでいる」と語り、外にいる私たちに「いつも喜べ」と語るパウロのメッセージにチャレンジを受けて、自分もその祝福に生きたいと思います。そのためにまず「恵みと平安が、神とキリストから益々豊かにありますように」と祈るパウロの祈りを自分の祈りとして願って、この書を読み進んで行きたいと思います。